

Eureka X

六年制通信 No.18 令和4年9月9日(金)号

「一つ」に出会うために

二つの道を提示されて、さてどちらを選択すべきか、今までにそんな相談をたくさん受けてきました。卒業後の進路選択をはじめ、非常にまじめな相談が多くありました。自分自身も若い頃に何度か悩みました。はっきりと今自分は人生の岐路に立っていると自覚する瞬間もありました。右に行くか左に進むかで自分の人生は大きく変わる、そう感じる瞬間を何度か体験しました。オファーを受けるべきか断るべきか、さてどちらに進むべきかを真剣に考えたことも一度や二度ではありません。これ、大きな声では言いにくいですが、うちに就職してからもあります。そして恩師や信頼できる友人に相談するわけですが、実体験から言えば、非常に大切な決断を他人に相談するときには、すでにある程度自分で結論を出しているように思います。私はそうでした。背中を押してくれる言葉が欲しいのですね、きっと。誰かに言われたからこういう決断をした、などと考えるはいけません。すべては自分の選択なのであって、それによって生じることのすべての責任は自分が負うわけですから。

さて、二択と言っても、右か左かという、つまり右へ行ったらもう左へはいけない、左を選択したらもう右は諦めなくてはいけない、そんな後戻りのできない究極の二択もあります。どちらもとも言いかねる場合もありますね。むしろその方が多いのかもしれない。だから迷うのでしょう。例えば「狭く深く」と「広く浅く」ではどちらがいいのか。漠然とした質問に感じるでしょうが、これ、案外多いのですよ。今までによく質問されました。しかし、よく考えてみると「狭く深く」と「広く浅く」を二択で考える必要があるのかどうかわからなくなってきました。狭く深い分野を持つということは自分の専門分野を持つということです。しかし、専門分野を持つことが広く浅い知識を捨てるということにつながるわけでもないでしょう。両方を身につけることは不可能ではないはずです。ただ、以前「今の社会ではどちらが有利か」と聞かれたことがあります。生きていく上で、どちらが有利かと。これは生き方の問題としては割とわかりやすく、もし自分で会社を興すなら狭く深い知識より広く浅い知識の方が役立つでしょうね。つまり狭く深い専門分野を持った人間は「雇う側」には向かないのです。例えば、私の応援している将棋の藤井聡太五冠は、将棋に対する知識は誰よりも深いはずです。しかし、一人暮らしは自分にはできない、とおっしゃっています。できないことが多すぎるんですって。彼は将棋のプレーヤーとして将棋連盟に所属することで自分を輝かしているわけで、彼が将棋連盟を創立することはできなかつたろうと思われれます。恐らく非常に専門的な能力を持った人間は、そこに目をつけた起業家に雇

われることになるのではないのでしょうか。起業するしないを、つまり「雇う側」に立つか「雇われる側」になるかを今の社会での有利不利の判断材料にはいけないかもしれませんが、生き方としては一つの指標になると思います。

実は私も同じ質問を自分の先生にしたことがあります。私の場合は「狭く深く」と「広く浅く」のどちらを目指すべきか、ではなくてこの二つは両立するかという問いかけでした。一つの専門を持つということは、それが深ければ深いほど膨大な時間をその修得につき込むということです。ですから当時の私は、専門を持てば、たとえ浅くても広い知識を得る時間などないのではないかと考えていたのです。この二つは矛盾する方向だと思っていたわけです。どちらかに絞らないと無理なのではないかと。今思えば、学生にありがちな質問ですね。その時先生は「いわゆる専門バカにはなりたくないね」と、そしてしばらく間を置かれて「でも専門バカにもなれない人がたくさんいるんだけどね」と笑っておられました。そして、専門に勉強しようと思える分野に出会うために、これまでたくさん勉強してきたのではないかと、そう考えるべきだと言われました。その一つに出会えたのなら、深く勉強すべきである、と。そして、一つを見つけれたらそれは幸せなことだ、とも。さらに **To know everything about something, something about everything.** という言葉も教えていただきました。「何かについては全てを知り、全てについては何かを知ること」という意味です。これが理想だね、と。つまり専門を持った後でも「狭く深く」、「広く浅く」勉強を続けることはできると、そう教えていただきました。そして、何度も、一つに出会えた幸せを大切にすべきだということを強調されていました。君たちも出会えるといいですね。

今週のおすすめ

・重松 清 『せんせい。』（新潮文庫）

子どもは学校へ通うようになって初めて親以外に身近に接する大人に出会います。それが先生です。子どもは先生を通していろんな大人がいることを知ります。私も小中高と一体何人の先生たちと出会ってきたのでしょうか。実はほとんど覚えていません。大きな声では言えませんが、校長先生となると全く記憶にありません。ちえっ。

この本には六つの物語があります。学校や先生や生徒を描かせたら当代随一だと以前から思っていたのですが、重松さんは本当にうまいですね。

本作には少し変わった先生ばかりが登場します。しかし、その先生のことを強烈に記憶していて今は大人になった教え子が、懐かしい恩師を温かく描きます。中の一編「にんじん」は、教師には胸の痛みを伴う短篇です。重松さんの具体的な描写に舌を巻きます。どこかの小学校で担任をしていたのではないかと、そうでなければ書けないと思うのですが…。この「にんじん」は教師ならラストシーンを想像して後味の悪い話になる予感がするに違いないと思いますが、にんじんと呼ばれていた生徒が恩師に向かって真面目に話す内容に、最後は救われました。このあたりの落としどころも非常に上手ですね。この夏は何冊か重松さんを読んだので、また紹介しますね。

BGMは 杏里 の オリビアを聴きながら でした…。